



昨年はサニブラウン・ハキーム(東レ)主催のレースでも優勝するなど、大きな注目を集めている今村



選手が参加可能な練習時間に合わせて3クラスに分かれているジュニアクラス。取材日はBとCが練習しており、準備運動から元気な姿を見せた



常に新たな発見があるため「100%納得のいく指導はない」と話す菅代表理事。「指導者も選手と同じように成長する必要がある」と持論も述べた

仙台市を中心に、石巻、多賀城、岩沼、名取各市で活動を展開している一般社団法人スタートライン。年中の未就学児から高校生までを対象にした陸上スクールで、2020年に設立と歴史は浅いが、現在約450人以上の生徒を抱えている。クラブを運営する菅秀輝代表理事は、小学生の頃から大学まで陸上に励み、全国大会も経験。しかし陸上競技人生はけがとの戦いだった。「自分の経験を踏まえて、大学ではどうすればがを乗り越えられるかという観点で陸上を勉強しました。その後、大学卒業後に社会人として競技を続けながら、ポランテアではなく職業として陸上を教えたいと考えるようになりました。当時全国的に法人のクラブ(陸上スクール)はほとんどありませんでしたが、それでも大学3年の時、震災に遭っている人々にお世話になったので、将来的には陸上を通じて世の中に貢献できる社会人になろうと決意しました」

大学卒業後、日本最大級のスポーツスクールの運営を手掛ける企業に就職。入社後は、陸上競技以外の競技の指導にも当たり経験を重ねる中で、スポーツを通して子どもたちの心を成長させる方法はないか、より良いクラブの運営はないかという視点でも物事を考えるようになったという。そして、子どもたちに陸上競技の魅力や楽しさ、目標達成の喜びを伝えるための社団法人を立ち上げた。

指導において大切にしていること

みんなの気持ちを盛り上げよう 指導者も日々努力

宮城県陸上競技特集2024
未来への共走

スタートライン

撮影●松田純二郎 文●松野友克

コーチ陣が子どもたちに声を掛けていて、場面が頻繁に見られた。話す内容も的確で、生徒たちも理解している様子が見られた。菅代表理事には、大学まで競技を続けた選手が指導者に進める道を確立したいという思いもあるという。

そんな環境で練習を行うメンバーはどのようなことを思っているのか。県大会で上位入賞経験のある先崎結登(小学6年)は「コーチの教え方がとても分かりやすい」、同じく佐々木笑鈴(小学6年)は「走っていて楽しい」と思える。どんな悩みもコーチたちが優しく相談に乗ってくれる」と語る。

昨年の日清食品カップ全国小学生交流大会6年女子100mで4位に入るなど、めきめきと力を付けている今村美咲(中学1年)も所属している。一度体験に来てチームの雰囲気の良いに引かれたという今村は、入会後に苦手だったスタートが改善。得意とする後半に力を生かせるような走りができるようになったという。今後の目標を聞くと「中学3年で11秒台を記録して宮城県記録を更新し、全中で優勝すること」と力強く答えてくれた。

陸上を教える仕事を確立するため、コーチ陣の研修にも力を入れているスタートライン。スクール生だけでなく、コーチも一緒に成長するという雰囲気がある。選手たちにも伝わる魅力となっているのだらう。



元気のいいメンバーが集まっているジュニアクラスC



落ち着いた雰囲気の中で集中して取り組むジュニアクラスB



中学生・高校生クラスは仙台校だけで70人以上がそろい、学年や学校、地域の垣根を超え活発な交流が行われている